

## へりパッド建設阻止の現場から

山本英夫

去る二月二日夕方、「本日未明、沖繩防衛局が約一〇〇名の作業員を伴い、高江で工事強行」の報を私は偶然PCで知った。その翌日、米軍ヘリが低空でホバリングを行い、住民の監視テントを破壊したとの報も入ってきた。その場で、これは何とかしなければと思いつながらも、当面の予定が立たず、やきもきしていた。二月二六日、防衛省前で、急遽作つた高江の写真パネルを広げて、防衛省職員に情宣活動を単独で行つた。通りかかる職員は何だろうと私のパネルを一瞥して通り過ぎる。

そして私はやつと、二月一八日～一九日、辺野古、二〇日～二二日、高江のスケジュールを組み、短期間ながら行つてきた。

私は二〇日(日)朝、高江現地に到着。沿道を見ると、ゲート前を中心に前後数百メートルに亘つて、獣避けの縄が嚴重に設置されている。これは作業員オフリミット・土のう投げ入りを阻む網だ。

私はN4に自分のテントを張り、朝を待った。夜は暗闇の中で、快適だった。二二日の夜は満天の星も堪能した。明け方は、ウグイス等が囀る。これで防衛局さえやつてこなければ、最高だ(…)。二二日七時三〇分。N4のテント前集合。簡単な挨拶と当日の任務分担を決め、配置に就く。私はN1に移動。一〇時過ぎには数十人が集まり、スタンバイ。一一時三分過ぎ、沖繩防衛局の動きが電話連絡で伝わる。一二時過ぎ、安波を車一〇台が通過との報も。一二時過ぎ、警察車両が通過し、防衛局の到来を告げる。一二時一五分、北側から沖繩防衛局、作業員を乗せた車輛一三台が車列を成してやつてきた。二台めは一〇トントラック。住民側が車道の前に立ちほだかり、進行を止める。しかし作業位置が決まっているらしく、警察はそこまでは車輛を入れろと迫ってくる。その際に作業員一〇数人が車輛から降り、作業を企む。支援者側は土のうを下ろそうとする作業員の動きに立ちほだかる。彼らが作業敷地内に入ることをむずかしくしている。

ジリジリした表情の沖防の福島土木課長。一三時一〇分、ちよつと小康状態に。しかしこの時既に作業員が続々と敷地内に入りこみ(ゲートの遠くから入る)、彼らは土のうを作業場に運搬しようとする。支援者は土のうの塊に座りこみ、何としても搬出をくい止めようとする。沖繩防衛局はこの回りに佇み、様子を伺い、ビデオを回す。

作業員はキャップ格を除けば皆若い。二〇歳前後だろう。彼らと対峙する闘いだが、彼らが敵という訳ではない。非暴力による阻止の闘いは困難だが、けんかではない。取っ組み合いでもない。高江の山を潰して、米軍のために、生活を破壊して良いのかと問いかけながら、説得をする。彼らは無気になりもするし、挑発をしかけようする一団(防衛局から言われている)もいるが、これに毅然と対峙する。小康状態の時は、若い男衆に対して、若い女性がゆんたくもする。にこやかムードが生まれもする。対話の心が大切だ。

しかし和やかに見える中にも緊張関係があり、それが三か月以上続いた。二二日、一月一日からほぼ連日、三月四日まで続いたのだ。その結果、作業は遅々として進まない。防衛局は三月～六月をノグチゲラの繁殖期として、音の出る作業を中止した。

沖繩防衛局のやる気は、一体どこから来ているのだろうか。米軍に取り入ろうと、せめて少しでも可能なところから手をつけ、「本気度」(忠誠心)を示そうというのだろうか。全くフザケタ話だ。

七月の工事再開を阻止する為に私達は、何ができるのだろうか? 大震災を前に驚愕せざるをえない現実がある中で、何が急務なのか、何が無意味なのかを明かにし、“やんばるの森と人”を守りたい。この二月、三月の闘いを報告する会を準備中である。

(やまもと・ひでお／フォトグラファー)